

プロローグ

一九八九年十一月二十九日（木）は、祖母の百ヶ日の法要と納骨の日だった。その日、私は、会社を休み、京都の実家へ日帰りで行くことにした。

朝、六時に家を出て、小田原の駅には七時半に着いた。小田原に停止する、八時十三分のひかり迄は十分時間があつた。久しぶりに、駅の窓から小田原城を眺めた。ベンチに座って待つこと、四十分、その間、高速で通過するひかりを何度も目にした。

途中、晴れで、富士山がはっきりと見え、大変きれいだった。今まで、私が見た中で一番きれいで、空気がすんで、はっきり見えた。

実家は、京都駅に近い下町にある。その近所では、昔からある古い家で、小さいが、祖母の祖父の代からある。長年、母と祖母のふたりで住んでいたが、二年前に母が死に、祖母一人、寂しく住んでいたが、祖母もこの夏に死に、今はだれも住んでいない。

古い、くさりかけた入口の戸を開けて入ると、弟の京太、おば、いとこの景子、それに、祖母の弟の泰一おじさんの、四人が、歴間のコタツに入って、ひっそりと、私を待っていた。私もコタツに加わると、皆、話し出した。

その話に割り込む様に、弟の京太は、黄土色の古びた日記帳を私に見せた。一瞬、私には見覚えがなかった。私が「何だ」と言う顔で、京太の方を見ると「家の中を整理していたら、おふくろの遺品箱から出てきた。兄貴のだよ。」と説明した。黄土色の布地の表紙には、DIARY/1984とある。私は、「は」とした。それは、私の十五歳の冬から、十六歳になった夏にかけて、誰にも悟られまいと、密かに綴った、遠い昔の、私の初恋を記録した日記だった。二十五年の間、家の片すみに眠っていた、その日記の存在を私は忘れていた。